様式３－１

学校名（課程名）	県立七戸高等学校（全日制の課程）

令和５年度「持続可能な地域づくり「あおもり創造学」プロジェクト事業
「あおもり創造学」による魅力発信・地域課題解決プログラム
実績報告書

１　プランの名称

七戸を遊ぼう＆楽しもう！～七高生が想像・創造する新たな七戸町とは～

２　具体的な目標

本事業は、本校の総合的な探究の時間に位置付け、グラデュエーション・ポリシー（以下、七高 GP とする。）に掲げた５つの力（自己肯定力・実行する力・考え抜く力・協議する力・郷土を愛する力）を身に付けることを目的とする。

このため、生徒個々が興味関心の高い分野別ゼミに所属し、通学地域及び居住地域と結び付けながら地域課題を自分事として明確化させ、地域間比較を行いながら情報収集・整理、分析力を高める。また、フィールドワークや体験活動等を積極的に取り入れ、学びの PDCA サイクルを繰り返し、主体的に学び続ける態度を身に付けさせる。更にゼミ内外でのブレインストーミングを定期的に実施し、確実にフィードバックすることで協働力、コミュニケーション力、プレゼンテーション能力を高めつつ目標到達を目指す。

３　プラン実績の評価方法

生徒自身による定性評価とともに、担当教職員による客観的な評価をもとに総合的に評価する。具体的には下記の方法で実施する。

（１）ワークシートや作成資料、調査結果などをポートフォリオ化し、年次発表会や総合学科発表会の際に生徒、教員による観点別評価を行う。

（２）関係機関及び協力機関に依頼し、総合学科発表会の評価表を用いて他者評価を行う。

（３）生徒の意識変容を評価するため、提示された３項目に関するアンケート調査を行う。

４　プラン実績の評価（目標達成の状況等）

（１）観点別評価

探究活動のサイクルに合わせ、意見交換及び生徒間で相互評価を行った。また、評価はフィードバックし、良かったところや質問内容等、記述評価欄も設けた。その結果、学びの PDCA サイクルが確立され、主体的な学習態度の育成に繋がったと考えられる。更に、協働力、コミュニケーション力を向上させる一助となった。

年次毎の中間発表会、校内発表会においては、県総合学科発表会の評価基準を元に、探究活動のサイクルに合わせて観点別評価表を作成し、生徒と教員による評価を実施した。地域課題の捉え方やアプローチ方法が様々あり、発表会を通して自身の今後の活動への示唆を得ることができた。

（２）発表会における他者評価

（１）同様、県総合学科発表会の評価基準を元に、探究活動の協力機関及び上級学校等から評価者を招聘して他者評価を実施した。数値化した評価は元より、記述評価が生徒の七高 GP 伸長に大きく関連していると推察する。具体的には、

・テーマの着眼点が良い。活動の展開について、実際に検証してみてほしい。
・調査を繰り返す中で、仮説が次々と広がっていき、探究サイクルができている。
・地域「活性化」について、具体的にどのような状態になれば「活性化した」と言えるか具体的に考えてみてはどうか。
・地域のニーズに応えている活動について、次は持続可能性を探究してほしい。

などの評価が寄せられた。今後の探究活動における助言と共に、生徒の地域課題解決に向けての意欲向上や郷土愛育成にも関与しており、他者評価は生徒にとっても有意義であったと判断できる。発表者以外の生徒は全員ポスターセッションとしたが、評価については課題が残る形となった。

（３）アンケート調査による評価

ア　対象及び調査期間

２年次生 103 名を対象とし、テーマ設定後且つ中間発表前である 10 月上旬と、２月中旬の計２回、web アンケートを配信した。調査の趣旨、データは統計的に処理され個人が特定されないこと、成績及び評価とは無関係であることを明記し、同意を得た生徒を対象としている。なお、無回答については分析対象から除外したため（有効回答率 10 月 80.6%、２月 85.4%）、無作為抽出した 83 名を対象とした。いずれも回答期間を 10 日間としている。

イ　アンケート及び分析の方法

Google フォームを用いた web 調査とし、あおもり創造学の共通指標である

①地域の魅力を再発見し、郷土愛が深まったか。
②地域課題への理解が深まったか。
③地域課題解決など、地域貢献したいとう気持ちが高まったか。

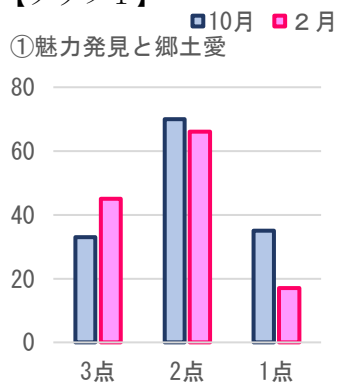
の３項目について、「かなりあがった」、「あがった」、「どちらとも言えない」の３段階尺度で測定した。これらについて、経時的変化を観測するために３点～１点で得点化した上で有意差を調べ、地域探究活動が生徒に与える変化を調査した。その他、独自のアンケート項目や自由記述欄を設け、それらも生徒の意識変容の評価とした上で考察した。データの統計解析は Microsoft Excel 2019 を用いて対応のある t 検定を行い、有意水準は $p<0.05$ とした。

ウ　分析結果

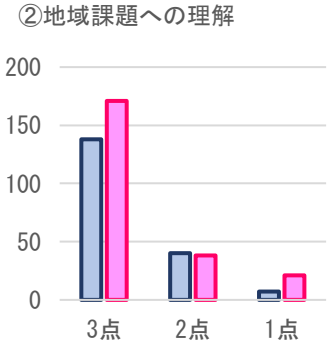
アンケート結果を得点化したものをグラフ１～３に示す。グラフ２に示すように、本事業によって地域が抱えている課題については理解を深めることができた。一方で、グラフ１からは地域の魅力の再発見や郷土愛の醸成までは至らなかったことが読み取れる。しかしながら、地域へ貢献したい気持ちを元々持っている生徒もいることがグラフ３から分かり、「地域の課題を何か解決したい」という想いを汲み取ることができる。その反面、地域課題への理解が深まることで、どのように地域に貢献すれば良いか分からず、意欲が低下する生徒も一部いることが窺える。

これらの結果について、本事業が生徒に与える変化に有意差があるか、t 検定を行った結果を表１に示す。前述のように、地域課題への理解については２月中旬が有意に高い結果となり、10 月上旬と比較して理解が深まったと判断できる（$t(82)=2.62$, $p=0.01$）。他２項目はいずれも有意差は見られず（魅力発見, $t(82)=0.76$, $p>0.1$; 地域貢献, $t(82)=0$, $p>0.1$）、大きな変化は無かったと言える。

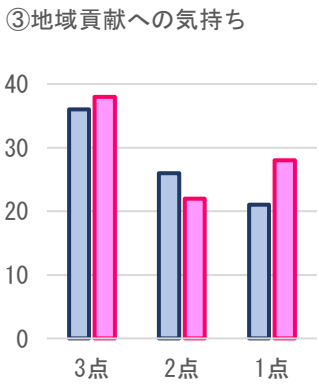
【グラフ１】



【グラフ２】



【グラフ３】



（４）総合評価及び考察・今後の課題

以上、これら（１）～（３）の結果を踏まえ総合的に評価すると、地域への関心を高め、理解を促進できたことから目標は概ね達成できたと考える。特に、地域課題への理解が深まったことは、地域のあらゆる情報を収集して整理し、分析した結果であると捉えることができ、地域の課題を明確化させることに繋がったと言える。また、「将来は青森県に住みたいか」と質問したところ、約 50%の生徒は「住みたい」と回答しているものの、この数値に変化は見られなかった。「まだ考えたことがない」という生徒が約 15%おり、本事業を通して自身の将来や進路、生き方を考える契機となるような仕掛け作りが必要であると

考える。即ち、地域への理解は深まったが、それらの課題を自分事として捉えるまでには至らなかったとも考えられ、地域だけではなく、自身と向き合う時間を設け、地域社会とどのように関連しているのかを考察する時間が必要であった。着目すべきなのは、「一度県外で生活してから考える」と回答した生徒が約 20%から 30%へ増加したことである。地域の課題を知ることによって、魅力を感じなくなってしまうような逆転現象が起きてはならない。そのため、地域の課題を理解した上で、地域の魅力や強みを発見できるような働きかけがもっと必要であったと今回の結果から省察する。

【表１】

	10 月		2 月			
	平均	SD	平均	SD	t 値	
魅力発見と郷土愛	1.69	±0.7	1.76	±0.74	0.76	N.S.
地域課題への理解	2.35	±0.8	2.6	±0.64	2.62	**
地域貢献への気持ち	2.18	±0.81	2.18	±0.84	0	N.S.

**p＜0.01

自由記述欄では、「自然が豊かで農作物や特産品が沢山あること」が地域の魅力として多く挙げられた。地域探究活動を通し、「歴史的な文化が様々あること」や「子育て支援が豊富であること」、「思っていた以上に地域活動やイベントがある」ということを新たに知った生徒も多かった。自分達が知らなかった魅力に気付くことができた一面もあり、そのために奮闘している地域の方々や企業と接する機会があったのは生徒にとって有意義な経験であった。

また、魅力的な地域にするためには「大型の娯楽施設が必要」だと考えている生徒が多く、それが若年層の流出の要因だと捉えていた。しかし、地域探究活動後には予想に反して「今ある自然や特産品を大事にする」、「まずは地域の魅力を知ることが大事」、「地域の魅力発信のための行動力や PR が足りない」との意見が多く挙げられた。新しい施設などの物的資源ではなく、既存の環境や人的資源を重要視する回答が増加しており、生徒の意識変容には地域連携が重要だと確信する結果となった。環境の変化を求めるよりも、環境を生かすことに視点を転換できたことは有益な結果であった。

一方で、本校生徒は地域貢献をしたい気持ちは元々高い傾向にあると言える。しかし、自分に何ができるかを考えるのは難しく、地域貢献への気持ちが本事業により高まったとは言い難い。そのため、どのような形であれば地域貢献をしやすいか、右の選択肢から複数選択で回答を得た。約 30～40%の生徒は、選択肢２、３のボランティア、イベント・祭りへの参加で貢献したいと考えており、既に取り組んでいる生徒も複数名見られた。選択肢４～７も 10 月上旬と２月中旬の結果を比較すると微増しており、地域理解が深まった結果であると推測できる。最も変化が顕著だったのは選択肢１の地元に就職することで地域貢献をする形であり、約 10%から 16%まで増加した。他のアンケート項目との関連性は不明であるが、地域探究活動の中で、地域課題に取り組んでいる人々の姿に感銘を受けた結果と推察され、今後の地域人財確保及び育成の期待が持てる結果となった。

【選択肢】

1 地元就職　2 ボランティア参加　3 イベント・祭りへの参加
4 イベント企画・PR 動画作成　5 特産品生産・商品開発
6 自然を生かすための企画運営　7 歴史・文化の展示等企画運営
8 日頃の交流　9 子ども・高齢者への生活支援　10 その他

今回の探究活動から、着実に学びの PDCA サイクルが確立しつつあり、徐々にではあるが、主体的に学び続ける態度の育成に繋がっていると考えられる。本事業を通し、体験的活動が最も生徒にとって学びを深める要素であることが感じられ、意見交換や発表をすることでコミュニケーション力やプレゼンテーション能力向上の一端を担う形となった。その結果を確実にフィードバックし、学習意欲を維持しながら学びを継続できる支援を行う必要がある。自身の興味関心を元に地域に目を向け、新たな魅力や課題を発見し、課題解決に向けた探究的な取り組みは物事の本質を深く捉える良い機会であったと評価できる。